ぼくを大きくする塩むすび

伊勢丘小学校　五年　秦　悠人

「ぼくは、母のお腹の中にいた時から、塩むすびが大好きだ。」

お腹の中にいた時なんて、不思議に思われるかもしれないが、それには訳がある。

これは、母がぼくをにんしん中の話だ。母は、にんしん中、つわりがひどくてほとんど食事がとれなかった。何も食べれず、お腹の中にいたぼくが、元気に育つかとても心配に思っていた。そんなある日、ふと食欲がわき「塩むすびが食べたい。」と母は父に言った。父がにぎった小さな塩むすびを一粒ずつゆっくりと、母は口に運んだ。今までは、何も食べることができなかったが、不思議と塩むすびだけは食べることができた。

「この子はおむすびが好きなんじゃね。」と母はうれしく思ったそうだ。

その後、元気に産まれたぼくは、母の思っ

た通りおむすびが大好きになった。母が言うには、ぼくは赤ちゃんのころからずっとお米が大好きで、離乳食ではおかゆばかり欲しがったそうだ。白いほかほかのご飯も好きだが、ぼくが一番好きなのは、塩むすびだ。母がにぎってくれる塩むすびもおいしいが、最近は自分でもにぎるようになった。塩むすびが好きだからこそ、ぼくにはこだわりのにぎり方がある。まず、お米はやわらかためにそして、塩はひかえめに。にぎる時は、やさしくふっくらと。手の平が熱くて熱くて、にぎるのは大変だが、そうして出来た塩むすびを食べた時、

「うまいなー。」

と思わず口に出してしまう。にぎりたての温かいお米がのどを通ると、体全体がポカポカして、心も体も元気になる。ぼくがにぎる、この塩むすびは、家族にとても好評だ。

母がにんにん中、何故塩むすびだけ食べることができたのか、今のぼくなら少し分かる

気がする。それは、ぼくがお米が大好きだから。ぼくの成長は、母のお腹の中にいた時から、ずっとずっとお米と共にあったんだ。そして、これからも、お米は、ぼくの成長を助けてくれるだろう。

炊飯器からお米が炊けた音楽が流れてきた。そろそろ昼食の時間だ。

「今日の昼ご飯、ぼくが塩むすびにするね。」